

アイヌと神々との関係

今回はアイヌがこの世の中のあらゆる存在をカムイ（神）とみなしてきたことに触れました。では、アイヌとカムイ達との関係は具体的にどのようなものなの



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

アペフチカムイの召使である炉の灰やおき（燻）がアペフチカムイの使いとして、相応しい神のところへ赴いて人間の訴えや願いを伝えることになっています。

でしょうか。簡単にいうとアイヌとカムイは互いに相手に対し権利義務を負う関係にあります。カムイは人間を見守る義務があるとともに人間に祀られる権利があり、人間はカムイを祀り、恩恵を受けたときは御礼をする義務がある一方、神に守られる権利があるのです。例えば、誰か事故など不本意な亡くなり方をすると、カムイの守護義務違反ということで、その家族は全身全霊で神に抗議します。その抗議は交代で夜通し、または数日間続くこともありました。これをアイヌ語ではイランヌッパ（イ・それ（神）の、ラン（ラム）・心に、ヌッパ・沢山の訴状を聞かせる）と言います。さらに、アイヌの人々は身内の不条理と思える不幸について抗議するとともに、亡くなった家族を身内の子どもとして生まれ変わらせて欲しいと祈るのです。アイヌの世界では「あの世」に帰った魂も、肉体や形をもって再びこの世に戻るという循環を繰り返していると考えられています。

アイヌの世界には様々な神様が存在しますが、この場合抗議や願いごとをする相手は、最も力のある至上神です。ただ、この訴えは直接するのではなく、家々の炉に鎮座し人間と天上の神々の間でメッセンジャーの役割を果たすと信じられているアペフチカムイ（アペ・火の、フチ・老女の、カムイ・神）を通じて至上神に伝えられます。ただし、アペフチカムイが他の神々へのメッセンジャーの仕事をする場合、直接行動するわけではありません。炉端で人々が祈りを捧げると、

この召使は夥しい数があると信じられています。召使の働き方もなかなか複雑で、お目当ての神に直接ではなく、その神と親しい神のところへ行って間接的に用件を伝えてもらったり、願いが叶うよう神々に根回しをすることもあるそうです。なお、ジョン・パチェラーは、富士山がかつて活火山だったことから、「フジ」の語源は火の神、アペフチカムイだと考えていました。アイヌのルーツは日本の古代、つまり縄文に遡ると信じていたからです。

ところで、日本で神の行いが悪いから文句を言うとか抗議するとかいうことはあまり聞いたことがありません。相手が神であっても抗議をするという文化は、アイヌ社会で何か争いが生じた場合に、当事者同士が自身の正当性について主張し合って決着をつけるというチャランケ（チャ・（正論を）口に、ランケ・下ろす=正論を主張する）という習慣にも通じると思います。神に対してすらも義務違反があると考えれば抗議をするわけですから、人間同士の問題で権利主張をするのは当然ともいえます。これは「長いものには巻かれろ」という日本的な考え方とは対象的で、非常に近代的であり民主的であるといえます。狩猟・採取が中心であったアイヌ社会では農耕社会のように一部の富の集中ということが起きなかったため、突出した権力者というものがいませんでした。その結果、問題の解決も日本の封建時代などに比べ、ずっと現代に近い方法で行われていたといえるのかもしれませんが。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大学北海道短期大学部（滝川市）で開催のベカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』（北海道教育委員会、2007、2008年）、『平成20～29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～9』（北海道教育委員会、2008～2017年）等。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。